

3 細谷地遺跡 R A 175出土の両黒土師器小型壺について

細谷地遺跡のR A 175竪穴住居跡カマド袖付近から、内外面黒色処理された土師器小型壺の一部が出土した。外面と口縁部内面にヘラミガキを施しており、胎土も緻密で非常に丁寧な作りである。明らかに他の土師器とは異なった様相を呈し、特別な用途であったことが想定される。盛岡南新都市地区画整理事業（盛南開発）関連で調査された古代遺跡のなかでも、内外面に黒色処理が施された土師器小型壺の出土は数例である。しかし、今回出土した小型壺と同じ器形のものは見当たらない。

そこで本節では、岩手県内で出土した内外面に黒色処理を施す土師器小型壺を概観し、若干の検討を試みたい。盛南開発調査出土資料に加え、管見に触れた岩手県内の資料を対象とする。なお、内外面に黒色処理が施された土師器小型壺（報文中では華瓶としている）を、ここでは両黒土師器小型壺と呼称する。また、小型壺は小型の壺・瓶類を総称したものとする。

（1）岩手県内の類例

盛岡市前野遺跡 R A 108竪穴住居跡（第88図）

竪穴住居跡の埋土上層から出土している。残存高4.8cm、体部最大径4.8cm、底径4.5cm。底部は回転糸切で、内外面にヘラミガキ調整と黒色処理が施されている。また、外面の体部下端には、手持ちヘラケズリ調整がみられる。頸部を欠くが、小型の短頸壺と思われる。出土層位と共に伴遺物より、9世紀中頃に属するものとされている。

また、遺構外ではあるが小型壺の一部が出土している。底径4.0cmで、体部内外面に黒色処理が施され、外面にのみヘラミガキ調整がみられる。

紫波町比爪館遺跡 S I 105竪穴住居跡（第89図）

竪穴住居跡の床面直上から出土している。口径6.4cm、底径7.2cm、器高11.3cmで完形である。底部にはハの字状の短い高台が付く。内外面に黒色処理が施され、外面にのみヘラミガキ調整がみられる。脚部が短いが、仏具の華瓶に似た器形をしている。共伴遺物より、10世紀前半頃と考えられる。

北上市南部工業団地内遺跡 I D 009 a 竪穴住居跡（第88図）

竪穴住居跡の周溝から出土している。口径6.7cm、底径4.0cm、器高9.6cm。内外面に黒色処理が施され、外面と口縁部内面にヘラミガキ調整がみられる。頸部に波状・鋸歯状の細い沈線を描き、体部中央に浮彫りの手法で鋸歯状の文様を施している。出土層位と共に伴遺物より、10世紀第2四半期までの時期におさまるものとされている。

奥州市林前遺跡 S I 51竪穴住居跡（第88図）

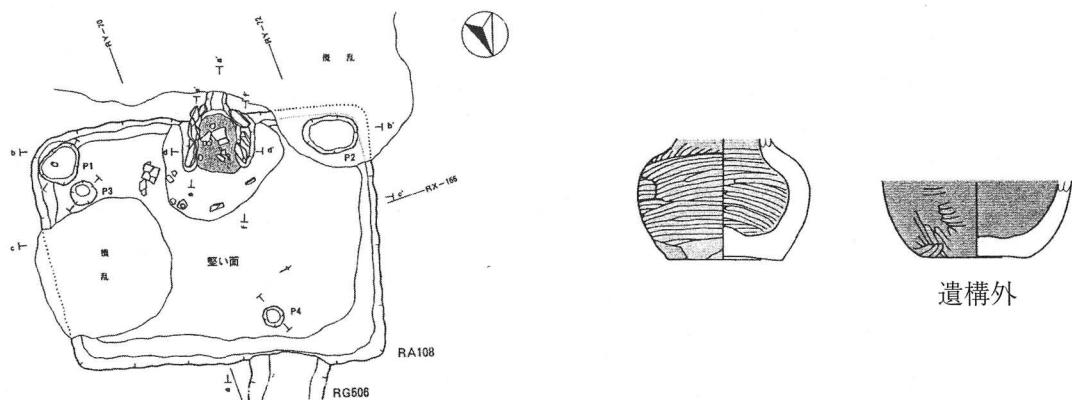
竪穴住居跡のカマド南土坑とその西側の床面から出土している。肩部の破片である。内外面黒色処理され、外面にのみヘラミガキ調整を施す。出土層位と共に伴遺物より、9世紀前半頃に属するものとされている。

盛岡市本宮熊堂B遺跡 R A 057竪穴住居跡（第88図）

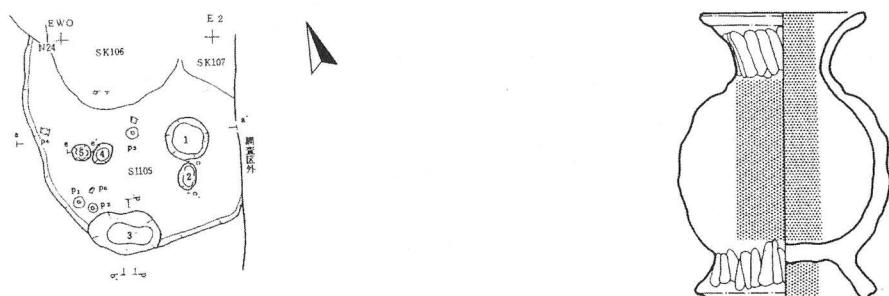
竪穴住居跡の埋土上層と床面付近から出土している。口径6.0cm、底径5.0cm、器高6.6cmでほぼ完

3 細谷地遺跡 R A 175出土の両黒土師器小型壺について

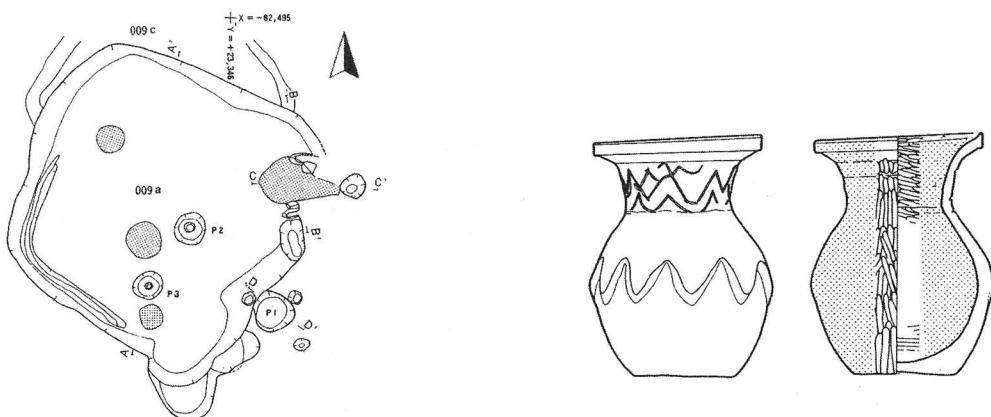
盛岡市 前野遺跡 R A 108堅穴住居跡



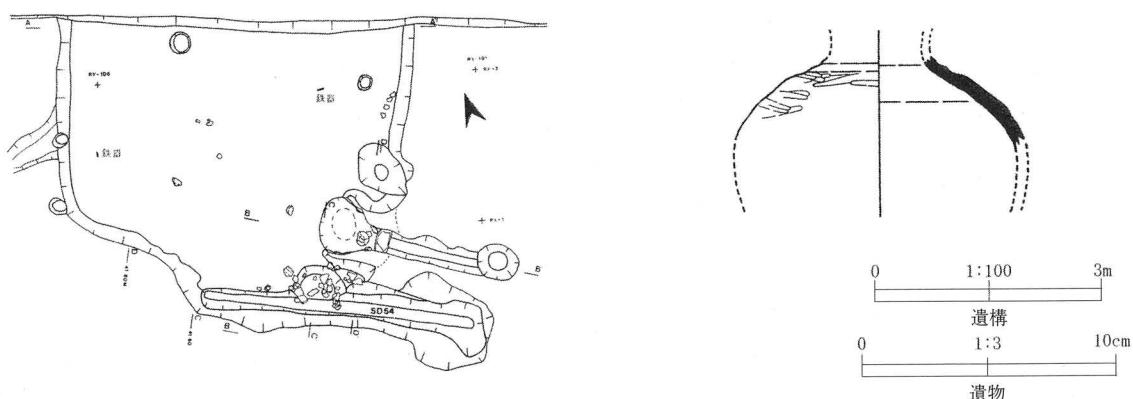
紫波町 比爪館遺跡 S I 105堅穴住居跡



北上市 南部工業団地内遺跡 I D 009a堅穴住居跡

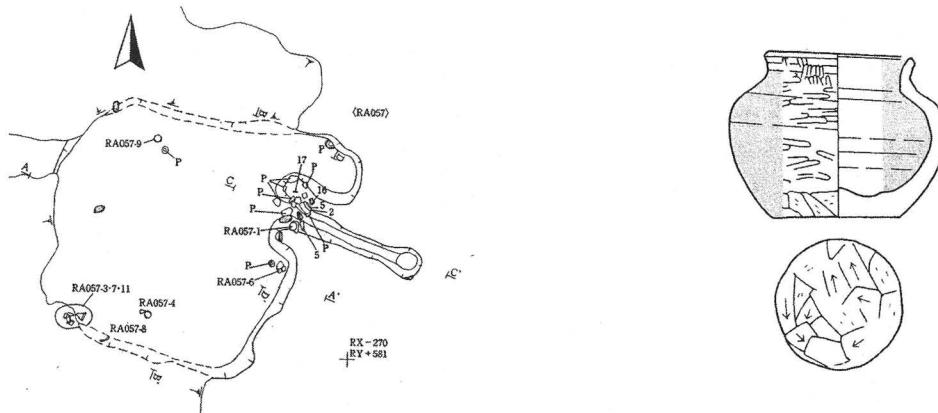


奥州市 林前遺跡 S I 51堅穴住居跡

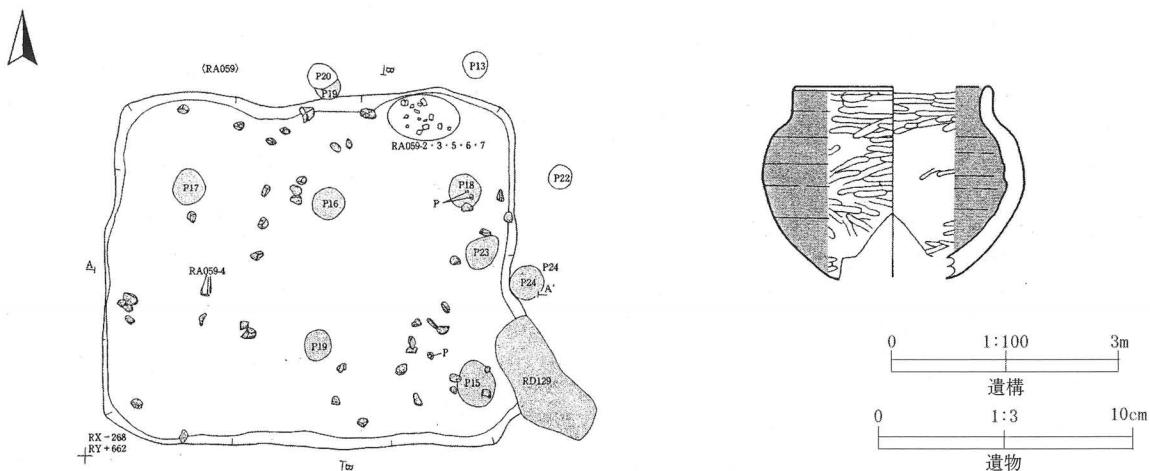


第88図 両黒土師器小型壺類例 (1)

盛岡市 本宮熊堂B遺跡 RA 057堅穴住居跡



盛岡市 本宮熊堂B遺跡 RA 059堅穴住居跡



第89図 両黒土師器小型壺類例（2）

形の小型短頸壺である。内外面黒色処理され、体部外面にヘラミガキ調整、体部下端から底部にかけては手持ちヘラケズリ調整が施されている。出土層位と共に共伴遺物より、9世紀後半に属するものとされている。

盛岡市本宮熊堂B遺跡 RA 059堅穴住居跡（第89図）

堅穴住居跡の埋土上層と床面から出土している。口径約8.0cm、器高約7.6cmの小型短頸壺である。内外面ともに黒色処理とヘラミガキ調整が施される。出土層位と共に共伴遺物より9世紀中頃に属するものとされている。

(2) 両黒土師器小型壺についての検討

岩手県内の両黒土師器小型壺について概観してきたが、遺構外のものを除いたすべての小型壺が堅穴住居跡からの出土である。ほとんどの堅穴住居跡については、一般的な堅穴住居跡との違いは認められない。しかし、北上市南部工業団地内遺跡IのD009 a 堅穴住居跡は、ロクロピット2基と椀形

鉄滓や坩堝などの製鉄関連の遺物が出土しており、工房的性格をもつものと考えられる（北上市教委 1993）。今回確認された両黒土師器小型壺には、長頸・短頸・台付きのものがあり、いずれも口成形で9世紀から10世紀の間に製作されたものと考えられる。また、その器形や丁寧な作りから日常容器とは考えにくく、祭祀儀礼で使用されたものと想定される。伊藤博幸氏は、平安時代における東北地方の内面または内外面を黒色処理する土師器について論じている（伊藤1984）。そのなかで、内外面を黒色処理する土師器を黒色土師器B類として、出土量の少なさや器種の限定化など、その特殊性について言及している。器種については、皿・椀・小瓶・華瓶など施釉陶器を模倣していると思われるものが多いこと、また胎土が精選されていることや、硬質または瓦器質であること、器面調整が丁寧に施されることなどを挙げ、非日常容器であることを指摘している。

これらのことから、細谷地遺跡 R A 175出土の両黒土師器小型壺は、伊藤氏のいう黒色土師器B類に分類することができる。北上市南部工業団地内遺跡I出土の小型壺のように特殊なものもみられるが、内外面に黒色処理を施し、瓦器質であるという点から見れば、これに含めて良いものと思われる。また、短頸壺の出土も目立ったが、内外面に黒色処理を施す短頸壺の出土例は、管見によれば群馬県でも見られ（山田2003）、仏教関連遺物として紹介されている。この他にも諸地域で散見されるものと思われる。

以上のことから、細谷地遺跡 R A 175出土の両黒土師器小型壺も黒色土師器B類に分類され、日常容器ではなく、祭祀儀礼の際に使用されたものと思われる。口縁部～肩部の破片のため、全体形は分からぬが、残存する器形から華瓶形の土器の可能性も考えられる。今後、両黒土師器小型壺の出土事例が増え、検討対象となる資料が得られることを期待したい。また、県外の事例も合わせて検討することも必要であるが、今後の課題としたい。
(田中美穂)

引用・参考文献

- 石田茂作ほか 1984 『新版 仏教考古学講座』 第5巻 仏具 雄山閣
 伊藤博幸 1984 「黒色土師器の供献具—東北地方における平安時代土師器生産の一断面—」『古代文化』 第36巻 第4号
 伊藤博幸 1989 「陸奥国の黒色土師器—岩手・宮城地域—」『東国土器研究』 第2号 東国土器研究会
 伊藤博幸 1990 「陸奥国における黒色土師器—その展開と終焉—」『東国土器研究』 第3号 東国土器研究会
 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2004 『本宮熊堂B遺跡第13次・15次・20次発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第467集
 北上市教育委員会 1993 『南部工業団地内遺跡I(1988・1989年度)第1分冊』 北上市埋蔵文化財調査報告第9集
 紫波町教育委員会 1983 『比爪館遺跡第6次発掘調査報告書』 紫波町文化財調査報告書第11集
 盛岡市教育委員会 1999 『前野遺跡 浅岸地区区画整理事業関連遺跡発掘調査報告書I』
 水沢市教育委員会 1979 『林前遺跡一区画整理に伴なう範囲確認調査—』 水沢市文化財報告書題3集
 山田真一 2003 「長野県のカミ・ホトケ関連遺構・遺物—「仏教関連」遺物を中心に—」『古代学フォーラム 古代の社会と環境 遺跡の中のカミ・ホトケ 資料集』